



Title	1970年代後半以降にみる花結びの伝承：手芸文化の 価値構築過程に注目して
Author(s)	矢島, 由佳
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 52-53
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100272">https://doi.org/10.18910/100272</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 1970年代後半以降にみる花結びの伝承 手芸文化の価値構築過程に注目して

矢島 由佳 大阪大学大学院在学

## はじめに

花結びは、日本の伝統文化の一つとして認識され、女子の手ざさみや平安時代の高貴な女性の教養の一つであったとして、江戸時代以降『源平盛衰記』に言及の上、繰り返し説明されてきた。他方、その文化の伝承過程は十分に明らかにされておらず、今日の花結びの伝承に関する一般理解として、花結びは茶道や香道の系譜に位置付けられことが多い。これまで花結びの伝承に関して、明治から昭和にかけて学校教育で花結びまたは紐結びが主に女性に教授されてきたことや、学校教育を通じての花結びや紐結びの技能の伝承が途絶えた後に1980年代以降、カルチャーセンター等で女性が花結びを楽しむようになったことが看過されてきた。そこで本発表は、1970年代半ばから1980年代の花結びの伝承に焦点をあて、花結びが「手作り」という一つの消費活動として1980年以降カルチャーセンターで伝承されるようになっていった背景を明らかにすることを試みる。それにより、茶道や香道の系譜の位置づけに留まらない花結びの伝承の過程の一端が明らかになると考える。本発表では、花結びを装飾的目的で生活空間において用いる紐結びを意味する語と定義して論を進める。本論の構成は、カルチャーセンター誕生と1970年代以降の女性の意識変化について述べた後、1970年代後半に「和の手芸」および「手芸としての結び」がいかに価値づけられ、提示されていたか、雑誌『装苑』および『ドレスメーキング』を例に分析したほか、カルチャーセンターにおける花結びの伝承についてインタ

ビュー、新聞記事等に基づいて論じた。その上で、文化財保護制度からみた花結びの伝承についても論じたものである。

## カルチャーセンター誕生と女性の意識変化

1970年代は、繊維産業の技術革新の結果、合成繊維が普及し、生産性が上がり、質の良い既成服が大量生産されるようになり、1970年には既成衣料品のサイズに関する日本工業規格（JIS）も制定され、その後1980年代には既成服が定着した。この既製服、すなわち、洋服の普及が広くみられるようになった時期と呼応して、1970年代以降裁縫教育は衰退期に入った。その潮流の中、和裁教育を通じての花結びの伝承が途絶えてからは、花結びはカルチャーセンターを通じて主に女性たちに伝承されていくこととなった。なお、先行研究によると、カルチャーセンターのブームの発端は、1974年4月1日に朝日カルチャーセンターが開講した後の同年2月1日の申し込みには応募者が殺到したことによることができ、1980年代にその黄金期を迎えたという。その背景には、女性の意識変化が1970年代に見られるようになり、性差別意識への問い合わせがあったと考えられる。

## 『装苑』および『ドレスメーキング』にみる「和の手芸」および「手芸としての結び」

1980年以降、花結びはカルチャーセンターで教授されたが、それを受け入れる素地は1980年以前に既に醸成されていたと思われる。そこで文化服飾学院が母体である文化出版局から刊行された

雑誌『装苑』およびドレスメーカー女学院を設立した杉野芳子が監修した1949年創刊の雑誌『ドレスメーキング』において、花結びを包摂する「和の手芸」および「手芸としての結び」に関する内容がどのように提示されていたかについてカルチャーセンターブームが始まった1974年からカルチャーセンターで花結びの教授が始まった1980年の間に刊行された雑誌の記事および広告を分析した。ここでの「和の手芸」は、「日本の伝統」に関する記述が見られ、材料に布や糸を使う手芸で作り方の記載があるものをさすものとした。分析対象を2誌に絞った第一の理由は、戦後に見られた洋裁学校ブームを牽引し、今日の裁縫文化や、ひいては手芸文化の礎を築いてきた教育機関である文化服装学院およびドレスメーカー女学院が発行した雑誌の影響力が他誌より大きいと考えたためである。第二の理由は、明治以来の裁縫教育との連続性をみるために、服飾教育機関が発行する雑誌の考察が有効だと考えたためである。

#### カルチャーセンターにおける花結びの伝承

カルチャーセンターにみる花結びの伝承に関する先行研究は、管見の限り存在しないため、花結びの第一人者である田中年子氏（1941生）に筆者が2023年6月17日に実施したインタビュー内容に則してその内実を記す。田中氏は入門した石州流清水派の茶道で師匠である橋田正園氏（1923-1991）に1964年に出会い、橋田氏が『玉のあそび』（寛政18;1801）の結びを復元していたことから結びに出会った。その後について1980年1月7日の朝日新聞に取り上げられたのを皮切りに、花結びが注目される機会が増えていったという。活躍の転機となったのは、1980年8月に放送されたNHKの番組「婦人百科」に橋田氏と田中氏が出演したことであった。放送直後に主婦の友社から花結び講座の開講依頼があり、翌月から開講された。講座開講時には、主婦の友社の別講座の有職組紐道明による組紐講座に在籍した約80名が

受講希望したため、講師側が集客する必要はなかった。他方、花結びの技能継承にも注目し、韓国における装飾結びの技術継承状況と対比した結果、韓国では「メドゥップ」と称される装飾的紐結びが国家により無形文化財として保護され、「伝統文化」として認識されている状況とは対照的に、花結びは、国から無形文化財として見做されてこなかったことが明らかになった。さらに、韓国と異なり、日本の国立美術館および博物館では花結びないし紐結びの収蔵はないことも示した。

#### おわりに

1970年代後半から1980年にかけて花結びに関する「和の手芸」や「手芸としての結び」に関する価値がどのように提示されていたかを明らかにすることを試み、手芸をその内容に含む当時の代表的な服飾雑誌である『装苑』および『ドレスメーキング』にみる記事および広告を分析した結果、花結びが誌面に登場したのは、一度であり、「和の手芸」として周知されていなかったことが明らかになった。つまり、そこから敷衍して、1980年にカルチャーセンターでの花結びの教授が始まらなければ、女性を中心とする花結びの伝承は途絶えていた可能性が高かったことが示されたといえよう。一方、「手芸としての結び」として、マクラメや中国服に用いる装飾結びが紹介されていたことを示した。また、「和裁、袋物、手織り」の通信講座広告には、趣味を通じて副収入を得ることが奨励され、女性が嗜む「和の手芸」に消費と収入を得るという二重の価値が提示されていたことのほか、花結び講座の広告は見られなかつることも示した。さらに、1980年に組紐を学ぶ女性を最初の受講者としてカルチャーセンターで始まった花結び講座は、受講者が香淳皇后に倣い、組紐技能を学んでいたことも明らかにした。以上により、花結びが「手作り」という一つの消費活動として1980年以降カルチャーセンターで伝承されるようになった背景の一端が明らかになったと考える。